日蓮聖人における薬王品十喩の解釈について

高森大乗

一、天台教学における薬王品十喩の解釈

法華経には総別二喩以外にも数多くの譬喩や故事が説かれており、これが譬喩経と呼ばれる所以ともなっているのであるが、その中でも薬王菩薩本事品には法華最第一なることを譬えた歎法体の十喩と、法華経の抜苦与楽の利益を唱えた歎法用の十二喩とが説かれている。前者は十種称揚とも言われ、法師品の已今当三説超過が縦に法華経の最尊なるを示すのに対し、横に法華経の最上なるを説示するものである[1]。具体的には、諸水の中に海第一なるが如く（第一喩・水喩）、衆山の中に須弥山第一なるが如く（第二喩・山喩）、衆星の中に月天子第一なるが如く（第三喩・衆星喩）、日天子の諸闇を除くが如く（第四喩・日光喩）、諸王の中に転輪聖王第一なるが如く（第五喩・輪王喩）、三十三天の中に帝釈天第一なるが如く（第六喩・帝釈喩）、大梵天王の一切衆生の父なるが如く（第七喩・梵王喩）、一切凡夫の中に五仏子第一なるが如く（第八喩・四果辟支仏喩）、一切の無学の中に菩薩第一なるが如く（第九喩・菩薩喩）、仏の諸法の王なるが如く（第十喩・仏喩）、この法華経も諸経の王であることを説く[2]。

この薬王品十喩について天台大師智顗は、別表によって明らかなように、『玄義』『文句』両部において解説を加えられている。『玄義』の十喩釈の結びに、

> 引諸譬喩明教相最大。例知用宗体名亦大如海。境智乃至利益亦大如海。教相如山、在四味教上。用宗体名境智利益亦復如是。教相盈虧円満如月。用宗体名境智利益亦復如是。教破化城。用宗体名境智利益亦復如是。教相自在。余亦如是。教相王中王。余亦如是。[3]

と示されるごとく、教相の比較において十喩を位置付けるのが天台の立場であり、五重玄義ならびに迹門十妙が悉く絶妙なることをもって法華の独勝を明かされるのである。なお第八喩の「有能受持是経典者亦復如是、於一切衆生中亦為第一」[4]の文は、後に日蓮聖人によって重視されるところとなるのであるが、天台大師においては何の解説も為されていないことを付しておく。次に妙楽大師湛然の『法華文句記』『法華玄義釈籤』における十喩釈についてであるが、妙楽は天台の語句の解説に始終しており、しかも十喩全体を扱ってはいないのでここでの考察は省略することとした。

薬王品十喩を論ずる上で看過できないのが、伝教大師最澄『法華秀句』所説の「仏説十喩校量勝」[5]である。伝教は経文と『玄義』の釈を対照して引用され、別表に示したごとく、十喩各々について爾前・法華の勝劣および他宗と天台法華宗の勝劣に関する見解を示されている。殊に、第八喩に関しては、天台・妙楽が釈されなかった持経者第一の義を前面に押し立てて、法華宗の優勝性を明かされている点が注目に値する。

このように天台・伝教の十喩釈を概観してみると、両者の相違は、天台が十喩を通じて法華経の爾前経に対する超勝を説いたのに対し、伝教は法華宗の他宗に対する優位性を唱えた点にあるといえよう。つまり、天台の解釈は所依の「経」そのものの勝劣判に立脚し、伝教の解釈は経を弘める能依の「宗」の勝劣判に立脚していたのである。これは、天台と伝教では破折の対象と目的が異なっていたためと推察できる。すなわち天台の破折の対象が南三北七や法雲ら涅槃学派・成実学派・華厳学派の提唱する教判そのものであって、そ

の目的が法華経を仏教哲理の究竟と位置付けることにあったのに対し、伝教の破折の対象は徳一に代表される既存の南都六宗の宗（衆）の存在それ自体であり、破折の目的が他宗を凌駕する天台法華宗の、国家による公認にあったことが理由と思われるのである。南都僧綱から独立した大乗菩薩戒壇の建立も、国家権力に迎合し僧綱の統制下に置かれた南都六宗の非主体性に対する反発から提唱されたものであったと受け取るとこができる。こうした一宗の独立と公認という大目的が、薬王品十喩釈にみられる伝教の諸宗破折の姿勢に影響を与えていたと言えよう。伝教大師において第八喩の持経者第一の解釈がなされるのもそのためと思われる。このように考えると、伝教の立場は後述する日蓮聖人の立場に近いものがある。しかし基本的には天台・伝教とも「法華経最為第一」という薬王品所説の元意に忠実に釈されており、その内容も第八喩の持経者第一に関する解説の有無を除けば大差はない。ところがこの一文は、日蓮聖人においては大きな意味を持っていたようで、やがて教義上画期的な解釈がなされるに至ったのである。この点について次に述べてみたい。

註

（1）河村孝照『法華経概説』（国書刊行会）二〇七頁。高橋智遍『法華経概説』（獅子王学会）二七九頁参照。なお、「十喩」の名数は、妙楽の『法華玄義釈籤』（『正蔵』三三巻八二七頁b）と慧沼の『法華玄賛義決』（『正蔵』三四巻八五八頁c）に確認されるのみで、管見の限り『文句』『玄義』には見られない。天台においては「十譬」と命名されていたようで、これは『玄義』（『正蔵』三三巻六八四頁b）に確認される。また吉蔵の『法華義疏』（『正蔵』三四巻六二一頁b）にも「十譬」の名数がある。

（2）『開結』五二二～五二四頁。なお日蓮聖人は『秀句十勝鈔』において「海山月日梵王仏全喩。輪王帝釈五仏子菩薩分喩」（『定遺』二三六八頁）と説かれ、第一・二・三・四・七・十喩は比較対象の領域が広い「全喩」、第五・六・八・九喩は比較対象の領域が狭い「分喩」と定められる。

（3）『正蔵』三三巻六八四頁c

（4）『開結』五二四頁

（5）『伝教大師全集』第三巻、一四～一八頁

二、日蓮聖人における薬王品十喩の解釈

（一）経の勝劣判に観る薬王品十喩の用法

薬王品十喩の主題が、爾前法華の勝劣を決するにあることは先述の通りである。聖人も当然この意義に着目され、遺文中に頻繁に引用されている。但し十喩全体を引用された例は、弘安元年の『秀句十勝鈔』[1]に伝教の『法華秀句』下の「仏説十喩校量勝」の文を引かれた部分に見られるだけで、多くの場合は二、三の喩を挙げて他を省略するかたちを取る。省略したからと言って、十喩そのものが譬える法華最勝の譬意は損なわれるものではない。

まず正元元年の『守護国家論』では十喩中の第一喩を抜粋して、

仏挙十喩。其第一喩以川流江河譬四十余年諸経、以法華経譬大海。末代濁悪無慚無愧

大旱魃之時、四味川流江河雖竭、法華経大海不滅少等説了、次下正説云、我滅度後後五百歳中広宣流布於閻浮提無令断絶定了。(2)

と叙述される。諸水の中で大海第一なる理由を旱魃（末法）においても不滅であることになぞらえて、これをもって法華経の末法為正の証文とされるのである。

また文永二年の『薬王品得意抄』には、第一喩から第四喩までを引用して法華経の超勝なることを詳細に解説されている。まず第一喩の諸水と大海については、

此品有十喩。第一大海譬。先第一譬粗可申。此南閻浮提ニ二千五百河。西倶耶尼五千河。総此四天下二万五千九百河。或四十里・乃至百里・一里・一町・一尋等有也。雖然此諸河総深浅事不及大海。法華已前之華厳経・阿含経・方等経・般若経・深密経・阿弥陀経・涅槃経・大日経・金剛頂経・蘇悉地経・密厳経等、釈迦如来所説之一切経、大日如来所説之一切経、阿弥陀如来所説之一切経、薬師如来所説之一切経、過去現在未来三世諸仏所説之一切経之中法華経第一也。譬如諸経大河・中河・小河等。法華経如大海等説也。(3)

と説かれ、更に「勝河大海有十徳」と大海の十徳をもって説明を加えられて(4)、法華の経力・力用が爾前諸経を凌駕する旨を明かされている。

次に第二喩の衆山と須弥については、

第二譬山。十宝山等者山中須弥山第一也。十宝山者一雪山・二香山・三軻梨羅山・四仙聖山・五由乾陀山・六馬耳山・七尼民陀羅山・八斫伽羅山・九宿慧山・十須弥山也。先九山者諸経諸山如。但一一財。須弥山衆財具勝其財。例如世間金不及閻浮提金。華厳経法界唯心・般若十八空・大日経五相成身・観経往生、法華経即身成仏勝也。須弥山金色也。一切牛馬人天衆鳥等此山依必失本色金色也。余山不爾。一切諸経法華経依失本色。例如黒色物値日月光失色。諸経往生成仏等之色値法華経必無其義也。(5)

と、須弥山を閻浮提金に比せられて、衆生の失本色をもって一切衆生悉皆成仏の譬説とされ、一切経の失本色をもって三乗方便一乗真実の譬説とされており、これをもって法華の即身成仏の優勝性を主張されている。

更に第三喩の星と月の喩に関しては、まずこれをやはり法華最第一の文証として挙げ、

第三譬月。衆星ハ或半里・或一里・或八里・或十六里不過。月八百余里也。衆星雖有光不及月。設百千万億乃至一四天下三千大千十方世界衆星集之、不及一月光。何況一星可及月光乎。華厳経・阿含経・方等・般若・涅槃経・大日経・観経等一切経集之、法華経不及一字。一切衆生心中見思・塵沙・無明三惑竝十悪五逆等業暗夜ごとし。華厳経等の一切経闇夜星ごとし。法華経闇夜月ごとし。法華経信深不信者、半月如照闇夜。深信者満月如照暗夜。無月但有星夜強力ノ者・カタマシキ者ナムトハ行歩ストイヘトモ、老骨ノ者・女人ナムトハ行歩に不叶。(6)

と述べられて、「闇夜」を三惑十悪五逆、「星」を爾前経、「月」を法華経、「強力ノ者」を正像の行者、「老骨ノ者」を末法の衆生に譬えられる。そして満月の夜には老人・女人ですらも自在に夜道を歩くことができるように、法華経は二乗・悪人・女人の成仏を説いて、末法のすべての衆生を救済する力用のあることを付け加えられている。更に続けて、

又月よりも暁ハ光まさり、春夏よりも秋冬ハ光アリ。法華経正像二千年よりも末法殊可有利生。（中略）次下文云、我滅度後後五百歳中広宣流布於閻浮提無令断絶等云云。此経文二千年後南閻浮提広宣流布すべしととかれて候は第三月譬の意也。此意

根本伝教大師釈云、正像稍過已末法太有近。法華一乗機今正是其時等云云。正法千年
像法千年法華経利益諸経可勝之。雖然月光自春夏正像二千年至末法秋冬如勝光。(7)

と、ここでは四季の月光を正像末に配し、秋冬（末法）の月（法華経）をもって後五広布の意に解され、法華経の末法為正を主張される。諸経の王たる法華経の末法流布の必然性を断言せられているのである。このように聖人は単に法華最勝の譬意だけで薬王品十喩を引用されたばかりでなく、『守護国家論』の第一喩釈でも見たように、十喩の主旨である法華最勝の義を通じて、末法に弘まるべき法が何であるかを繰り返し重説されるのである。

次に第四喩の日と月の喩については、同じく『薬王品得意抄』に、

第四譬日譬。星ノ中ニ月ノ出タルハ星ノ光ニハ勝月光、未消星光。日中非消星光又月光モ奪テ失光。爾前如星法華経迹門如月寿量品如日。寿量品時迹門月未及。何況爾前星。夜星時月時衆務不作。夜暁必作衆務。爾前・迹門猶生死難離。至本門寿量品必可離生死。(8)

と、三光をもって前迹本の勝劣の次第を明かされている。すなわち「星」を爾前経、「月」を法華迹門、「日」を法華本門に譬え、権実相対・本迹相対を判じられるのである。作務の義は行者の断惑証理に約すもので、昔迹本における分段・変易生死の離不離をもって法華の超勝を論じるものである(9)。このように、聖人は薬王品十喩を引用して法華の超勝性を唱えると同時に、十界皆成・即身成仏・生死離脱等の各面からその正当性を裏付けられ、更にそれらを総括して法華経の末法流布の必然性を強調されているのである。

このほかにも文永三年の『法華題目鈔』には、

過去の七仏千仏・遠遠劫の諸仏の所説、現在十方の諸仏の諸経も皆法華経の経の一字の眷属也。されば薬王品に仏宿王華菩薩に対して云、譬如一切川流江河諸水之中海為第一、衆山之中須弥山為第一、衆星之中月天子最為第一等云云。妙楽大師釈云已今当説最為第一等云云。此経の一字の中に十方法界の一切経を納たり。(10)

と、第一・第二・第三喩を引いてこれに三説超過の説を加えられ、一切経は法華経の「経」の一字の眷属であると述べられている。三説超過と十喩称揚の関係は以前に述べた通りであり、日蓮聖人もその義で両者を併せて引かれたものと推察できる。いずれにせよこれらの事実から、法華最第一とは取りも直さず法華経が諸経を摂取・包含・具足することを意味するものと見なすことができよう。

以上のように、日蓮聖人は天台や伝教の解釈と同様、薬王品の十喩を法華最勝の証文とされ、時には末法為正の根拠として用いられたことが分かる。ここでは佐前の遺文に限っての考察であったが、佐後の遺文にも同様の義はしばしば説かれており(11)、このことは法華最勝の十喩釈が聖人の御生涯全体を通じて一貫したものであったことを窺わせるのである。

（二）人の勝劣判に観る薬王品十喩の用法

さて、聖人は法の勝劣を論ずる場合に薬王品の十喩を引用される一方で、人すなわち行者の勝劣を比較される場合にもしばしばこれを用いられている。つまり、それは第八喩所説の「有能受持是経典者亦復如是於一切衆生中亦為第一」の経文に根拠を得た解釈である。この見解は、佐渡流罪を経て法華経行者としての自覚が高まった時期を契機に遺文中に活かされるようになり、その初見は、文永九年の『真言諸宗違目』に確かめられる。

法華経云又如大梵天王一切衆生之父。又云此経〇諸経中最為第一。有能受持是経典者亦復如是。於一切衆生中亦為第一等云云。（中略）星中勝月星月之中勝日輪。小国大臣下大国無官傍例也。外道得五通仏弟子小乗三賢者未得一通天地猶勝。法華経之外諸経大菩薩下法華名字即凡夫。何汝始驚之乎。依教定人勝劣。先不知経勝劣何論人高下乎。(12)

ここでは、第七喩の梵天の譬え、第八喩の持経者第一の文、第三喩の月の譬え、第四喩の日の譬えを順に挙げて、諸経の菩薩は法華の名字即の凡夫にも劣ると叙述され、経の勝劣を知ればこそ人の勝劣も定まることを説かれている。ここに略引される薬王十喩は第八喩を取意したものと考えられる。

あるいはまた文永一二年の『大田殿許御書』では

法華経第七云有能受持是経典者亦復如是。於一切衆生中亦為第一等云云。此経薬王品挙十喩超過已今当一切経云云。第八譬兼有上文。所詮如仏意者非詮経之勝劣。法華経行者勝一切之諸人之由説之。大日経等行者諸山・衆星・江河・諸民也。法華経行者須弥山・日月・大海等也。(13)

と示されている。ここでは「第八譬兼有上文」とあるがごとく法華行者を称歎した第八喩が他の九喩にも一々あるべき旨を明言されている。更に同年の『四条金吾殿女房御返事』においても、

十喩は一切経と法華経との勝劣を説せ給と見えたれども、仏の御心はさには候はず。一切経の行者と法華経の行者とをならべて、法華経の行者は日月等のごとし、諸経の行者は衆星灯炬のごとしと申事を、詮と思めされて候。なにをもんてこれをしるとならば、第八の譬への下に一の最大事の文あり。所謂此経文云、有能受持是経典者亦復如是。於一切衆生中亦為第一等云云。此二十二字は一経第一の肝心なり。一切衆生の目也。文の心は法華経の行者は日月・大梵王・仏のごとし、大日経の行者は衆星・江河・凡夫のごとしととかれて候経文也。(14)

と断言せられている。すでに第八喩のみならず、十喩全体が教経勝劣の意から行者勝劣の意へとその意義を転換されている点は注目に値する。

同様の解釈は、建治元年の『撰時抄』にも見られる(15)。そこではやはり「有能受持是経典者亦復如是。於一切衆生中亦為第一」の文を引かれた後で、華厳経の行者たる普賢・解脱月・龍樹・馬鳴・法蔵等、解深密経・般若経の行者たる須菩提・嘉祥・玄奘等、真言宗大日経の行者たる善無畏・金剛智・不空等、涅槃経の行者たる迦葉・法雲・南三北七の十師等を挙げて、これらのどの諸師よりも、

末代悪世の凡夫の一戒も持たず、一闡提のごとくに人には思たれども、経文のごとく已今当にすぐれて法華経より外は仏になる道なしと強盛に信じて、而も一分の解なからん人々は、彼等の大聖には百千億倍のまさりなりと申経文なり。（中略）されば今法華経の行者は心うべし。譬如一切川流江河諸水之中海為第一持法華経者亦復如是。又如衆星之中月天子最為第一持法華経者亦復如是等と御心えあるべし。当世日本国の智人等は衆星のごとし、日蓮は満月のごとし。(16)

と示されている。四〇名近い菩薩大聖を列挙して、但信無解の法華経の行者は彼らの百千億倍も勝れたりと断ぜられる文句は圧巻である。「一戒も持たず、一闡提のごとく」（無戒・無信）かつ「一分の解なからん」（無解）の末代悪世凡夫を逆縁謗法無智の悪人と定

め、そのような中で法華経を「強盛に信じ」ることのできる有信無解、信力故受念力故持の分際は、まさに諸水の中の大海、衆星の中の月天子であると断言せられるのである[17]。また、経文には「如諸水之中海為第一 此法華経者亦復如是」[18]「如衆星之中月天子最為第一 此法華経者亦復如是」[19]とあるところを「此」の一字を意図的に「持」に置き換えて、これらの譬喩が法華経の持経者についての勝劣判であると見なされている点は興味深い。これもまた、『四条金吾殿女房御返事』に「一の最大事の文」「一経第一の肝心」「一切衆生の目」と定められた第八喩中の二十二字が、薬王品十喩のすべてに共通の理念として解釈されていることの証しと言える。

このほかにも建治二年の『松野殿御消息』には、

法華経薬王品云、有能受持是経典者亦復如是於一切衆生中亦為第一等云云。文の意は法華経を持つ人は男ならば何なる田夫にても候へ、三界の主たる大梵天王・釈提桓因・四大天王・転輪聖王・乃至漢土日本の国主等にも勝れたり。何況や日本国の大臣・公卿・源平の侍・百姓等に勝たる事申に及ばず。女人ならば嬌尸迦女・吉祥天女・漢の李夫人・楊貴妃等の無量無辺の一切の女人に勝れたりと説れて候。[20]

とあり、また同じく建治二年の『報恩抄』にも、

法華経の第七云、有能受持是経典者亦復如是。於一切衆生中亦為第一等云云。此経文のごとくならば、法華経の行者は川流江河の中の大海、衆山の中の須弥山、衆星の中の月天、衆明の中の大日天、転輪王・帝釈・諸王の中の大梵王なり。[21]

と示されるように、十喩を行者の勝劣判の文証として引用される傾向にあり、佐後における十喩引用の特徴として挙げられる[22]。そもそも譬喩は随他意的な方便の説であり、機により時により応変する性質を有しているものであるから、聖人の内証が佐渡流罪を機に深化すれば、当然その用法も一変して然るべきなのである。譬喩に限らず、経文や説話の引用の姿勢にもこの特徴は確認でき、日蓮聖人がいかに柔軟に仏説や教理に対する理解をもたれていたかを知ることができよう。

三、むすびにかえて

以上のように、日蓮聖人においては薬王品の十喩を人と法の勝劣といった二面性で活用されていたようである。十喩の経中の元意が爾前法華の勝劣を述べたものであるから、経が最勝であれば第八喩所説の如く必然的に経の行者も最勝であるわけで、その意味では聖人の用例は経文の意図するところに忠実であったと言える。また聖人が主に法華経の本文のみを引かれており、『玄義』『文句』『秀句』等の十喩釈には触れられていないことも重要な特徴として挙げらる。これらの事実から十喩引用の意義について考察してみると、薬王十喩は経典所説の法華最勝の元意に則って引用されたことが明らかであり、これは人師の解釈に基づかずに法華経のこころを素直に受けとめようとされた聖意の現れと看取することができる。あるいは天台・伝教らの釈義を踏襲しながらも末法の今という時代に立ってこれらを再び咀嚼しなおし、自らの内証と重ね合わされて、法華経に説かれる釈尊の御心を読まれたものと拝受することもできる。特に佐後においては、聖人の行者意識の高揚とも関連してか、第八喩の二十二字をもって行者最勝の証文とされるに至っている。度重なる法難を経て、聖人は十喩を経の浅深ではなく人の高下を判釈する物差しとして捉え直されたのである。法華最勝なるが故に末法名字即凡夫の行者が最勝であり、その行者の出

現と受難色読によって再度法華最勝が立証されるという構図のなかで薬王品十喩が位置付けられている。かくして、佐前においては教弥実位弥下なるが故に末法為正たることを表顕した薬王品十喩が、佐渡流罪を経て教弥実位弥下なるが故に行者最勝であるという理念に集約され、これをもって日蓮聖人は法華経に明かされる救済の世界をこの末法に具現する導師が誰であるかを披瀝されたのである。

これは同じく法華の超勝を唱えている高原鑿水喩・薬王十二喩・優曇華喩・盲亀浮木喩にも言えることで、わけても優曇華喩・盲亀浮木喩が薬王十喩と同様、佐渡流罪を機に経の勝劣判から行者の勝劣判へと転換している点は注目すべきである。

註

(1)『定遺』二三六七～二三七一頁

(2)『定遺』一〇二頁

(3)『定遺』三三七頁。二千五百河については『録内啓蒙』下三四―三五（『日全』七三四頁）に解説あり。

(4)『定遺』三三八頁。大海の十徳については『録内啓蒙』下三四―三六（『日全』七三四頁）に解説あり。なお『注経』にもこの十徳の引用がある。（『定本注法華経』四九六頁）

(5)『定遺』三三八～三三九頁。十宝山については『録内拾遺』七―二八（『日全』三七四頁）、『録内啓蒙』下三四―三七（『日全』七三五～七三六頁）、『録内扶老』一三―三一（『日全』七三七頁）に詳しい。なお『扶老』には「須弥山金色也」の文以前を相待妙、以後を絶待妙と解している。

(6)『定遺』三三九頁。星月の里数については『録内拾遺』七―二八（『日全』三七四頁）、『録内啓蒙』下三四―三八（『日全』七三五～七三六頁）、『録内扶老』一三―三一（『日全』七三七頁）に詳しい。

(7)『定遺』三四〇頁。なお『録内拾遺』七―三〇（『日全』三七五頁）、『録内扶老』一三―三一（『日全』七三八頁）には、秋月・冬月等にまつわる和歌を引いている。

(8)『定遺』三四〇頁

(9)『録内啓蒙』下三四―四〇（『日全』七三七頁）参照。

(10)『定遺』三九六頁

(11)『兄弟鈔』（『定遺』九一八頁）、『立正安国論（広本）』（『定遺』一四六七～八頁）、『千日尼御前御返事』（『定遺』一五四〇頁）、『日眼女釈迦仏供養事』（『定遺』一六二五頁）、『上野殿母尼御前御返事』（『定遺』一八一〇頁）、『南条殿御返事』（『定遺』一八二〇頁）

(12)『定遺』六四〇頁。『日蓮聖人御遺文講義』一七巻（二〇六～二〇七頁）では「小国大臣」等の文は『玄義』の「譬如小国大臣来朝大国失本位。雖預行伍、限外空官。限外空官若大国小臣心膂憑寄、爵未高他所敬貴」（『正蔵』三三巻七三九頁ｂ）や『釈籤』の「云小国大臣等前三教名為小国。（中略）並失羅漢及地住等次位之名名失本位。（中略）若円大国凡夫小臣名名字仏。故曰憑寄」（『正蔵』三三巻八九五頁ａ）の文意によって『法華秀句』の意を敷衍したものとされる。

(13)『定遺』八五四頁

(14)『定遺』八五五～八五六頁
(15)『定遺』一〇五六～一〇五八頁
(16)『定遺』一〇五七～一〇五八頁
(17)『日蓮聖人御遺文講義』四巻（五一八頁）、『録内啓蒙』上一二―七〇（『日全』五七九頁）参照。
(18)『開結』五二二頁
(19)『開結』五二三頁
(20)『定遺』一一三九頁
(21)『定遺』一二一八頁
(22) このほかにも第八喩の持経者第一の文を引用された遺文として『立正安国論広本』（『定遺』一四六八頁）、『富木殿御返事』（『定遺』一八一八頁）等がある。文永元年の『立正安国論』（『定遺』二一九頁部分に相当）に持経者第一の文の引用がないのは、やはり行者意識の有無によるものか。また弘安元年の『秀句十勝鈔』には「日蓮疑云真言宗畏・智・空・法・覚・証・與伝教大師末学法華行者四衆勝劣如何」（『定遺』二三六九頁）と説示された後に薬王品十喩を一々挙げておられるので、この場合も行者勝劣の例証として十喩が用いられたものと理解できる。なお、仮に今回の考証が正しいとすれば、断簡二〇二（『定遺』二九二六頁）および断簡二二三（『定遺』二九三四頁）の系年は龍口法難以降と断定することも可能である。